今治歴史散歩

大　成　経　凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第34回は、桜井地区で〝宮島さん〟の呼称で親しまれる、麦藁船を海へ流す年中行事を紹介し、その由来を歴史散歩したいと思います。

第34回　桜井厳島神社の〝宮島さん〟

●志島ヶ原に鎮座する厳島神社

桜井厳島神社（令和５年８月３日撮影）

世界遺産の安芸宮島・厳島神社（広島県廿日市市）では、旧暦６月17日の夕方に〝日本三大船神事〟の一つとされる管絃祭が開催されます。愛媛県内の分社では、興居島や三津浜の大祭が、すでに明治末期から大正初期にかけて賑やかだったことが海南新聞の記事などからもうかがえます。当時、今治と松山からも、管絃祭へ向かう臨時の観光船がありました。

今治地方にも多くの分社がありますが、本社の管絃祭を模して、船を使った行事を続けるのは桜井厳島神社だけです。同社は桜井綱敷天満神社の境内社で、国指定名勝・志島ヶ原の松林の中にひっそりと鎮座しています。桜井海岸に臨む、東の鳥居の近くです。もとは桜井漁協の近くにあったようで、境外社の合併で現在地へ移転するのは明治41（1908）年のことでした。

桜井では、明治42年から桜井浜に汽船が寄港するようになり、漆器の原料・製品の輸送で大きな転機ともなりました。すでに九州福岡では桜井出身の田坂善四郎が月賦販売を始めており、大正期に桜井漆器は黄金期を迎えています。一方、桜井河口港には漆器倉庫が立ち並び、江戸後期から続く椀舟行商も残っていました。しかし、大正12（1923）年12月に国鉄伊予桜井駅が開業すると、物流を取り巻く環境は一変し、椀舟は姿を消していったのです。

奉納された藁船（令和４年７月15日撮影）

●祭礼を盛り上げる藁船流し

平成18（2006）年に近田利勝氏が作成した藁船の由来書によれば、大正初期に〝余興で仮船を造り点火して数百を流し神に奉るという行事〟があって盛観を極めたようです。男子の生まれた家が、その子が７歳になるまでに流すという

風習でした（２歳は流さないとも）。

では、現在の祭礼行事の様子ですが、令和５（2023）年は８月３日の開催となり、午後７時から社殿で綱敷天満神社の氏子総代と桜井漁協の関係者が集い祭典を執り行いました。７時半頃からは、外の祭壇前で奉納船と奉納者のお祓いが行われ、それを終えると波打ち際まで父親が藁船を担いで運びます。そして、行燈（あんどん）の蝋燭（ろうそく）に火をともし、約100ｍ沖に碇泊する御座船（漁船）近くまで泳いで渡すのです。その後は、風や潮流の力に任せて、藁船は沖へと流されていきます。奉納者には法人・団体もありますが、多くは数え７歳までの男児のいる家庭で、子供の健やかな成長を願います。

藁船流しの光景（令和４年７月15日撮影）

船の外見は、和船をイメージした全長1.0～1.5ｍの大きさで、近郷で収穫された裸麦の藁を用いています。帆柱に掲げた紙製の帆には赤い鳥居と松が描かれ、「奉納 厳島神社」の文字と男児の名前（船名）が記されます。また、灯りをともす行燈を船体中央に載せ、船首の水押（みよし）には分け御霊（みたま）を宿した御幣（ごへい）が装着されます。

●藁船流しの現況と課題

令和５年は10隻の奉納があり、暗闇の時間帯に合わせて藁船は次々と集結しました。40年ほど前は200隻の奉納があり、神主も３人態勢で臨まないとお祓いが追いつかなかったようです（現在１人）。お祓いを受けた順に藁船は沖へと旅立ち、幻想的な波灯りの光景に観衆は感嘆の声をあげます。平成24（2012）年公開の長編アニメーション映画『ももへの手紙』（沖浦啓之監督）でも、そのシーンが再現されています。

奉納船の数が減った背景は、少子化だけでなく、規格に合った藁の減少と船の作り手の減少・高齢化も大きな要因となっています。かつては、自作できない家庭のために、藁船製作を商売とする職人もいました。令和４年は、コロナ禍で中止になっていた行事再開を盛り上げようと、桜井綱敷天満宮みこし保存会と来島会「桜井プロジェクト」のメンバーが藁船を20隻製作。地元消防団の若手が泳ぎ手となって、一般と合わせて35隻の奉納・船出が見られました。

藁船流しが終わった後も、祭典は続きます。御霊が午後９時頃に小さな神輿に載せられ、海岸で待機する御座船に宮司とともに乗り込みます。沖合を太鼓の音色を響かせながら１時間ほど渡御し、豊漁・航海安全の祈願を行うのです。神輿が社殿に戻るまでが祭礼で、地域色のある〝宮島さん〟を、今後も続けて欲しいと願います。

御座船へ向かう宮司と御神輿（令和４年７月15日撮影）